

キサーゴータミー説話

仏教説話という世界があって、悪いことをした人は牛になったり、その牛が一生懸命働くとまた人間に戻ったりと、そこで語られる話は比較的分かり易い。これは人々に仏の世界を広めるためなのでしょうが、このインドの仏教説話は深いというか難しい。

今回はもの思う秋にふさわしく、深くて難しい「キサーゴータミー説話」を紹介してみましょう。



サーヴァッティーの町にひとりの長者が居た。彼は一生を善良な人として過ごし、40億の財産を得た。ところがその40億の財産が、ある時全て炭になってしまった。長者はそれを見て悲しみ、食事をとらず、床についてしまった。

長者の友人のひとりがその出来事を聞き、彼の家に来て来た。

「友よ、悲しんではいけない。私はあなたのすべきことを知っている」

「私は何ををするのですか、友よ」

「自分の店に敷物を敷き、あなたの財産だったものの炭を積み上げ、売りなさい。あなたの店に来た人は、『ほかの人たちは衣服や蜜、砂糖などを売っているのに、あなたはなぜ炭を売っているのですか』と言うでしょう。そこであなたはこう云いなさい。『自分の持っているものを売らずに何を売るのですか』と……」

長者が炭を積み上げて店に座っていると客が来て、友が言ったとおりのことを言った。長者は教えられた通りに答えながら、客の両手のひらに炭を乗せて渡した。するとその炭は客の手の中で**黄金**に変わった。

暫くして長者の家に、若い貧しい身なりの娘がやってきた。

「ほかの人たちは衣服や蜜、砂糖などを売っているのに、あなたはなぜ**黄金**を売っているのですか」

「娘さん、どこに黄金があるのですか」

「あなたの前に詰まれているのは**黄金**ではないのですか」

彼女は云いながら長者の炭を手にいっぱい取ると、それが実に手の中で**黄金**に変わった。そこで長者は残りの炭を全て彼女に与えると自分の息子のところへ連れて行き、二人を結婚させた。

その後彼女は妊娠し、十月の真理通りに子供を産んだ。しかし、彼女の子供は両足で歩くようになった頃、死んでしまった。

彼女はそれまで死というものを見たことがなかったので、人々がその子を火葬にしようと連れ出そうとするのを拒み、「私は子供の薬を探してきます」と言っ、死んだ子の死体を腰に抱えて村を出て行った。それから「私の子供の薬を知っている人はいませんか」と言いながら、家から家を訊ね歩いた。

人々は彼女の姿を見て「娘さん、あなたは正気を失っている。死んだ子供の薬を訊ね歩いている」と憐れんで言った。しかし彼女は人々に「私は必ず子供の薬を知っている人を見つけ出します」と言って、探すのを止めなかった。

ひとりの賢者が彼女のところにやってきて言った。

「娘さん、私はその薬を知らない。けれども薬を知っている人を知っています」

彼女は賢者に教えられた尊師の元に出掛け、礼拝して近づくと

「尊師よ、あなたは私の子供の薬を知っていますか」と尋ねた。

「そうです。知っています。それは、ひとつかみの白カラシの種なのです」

「白カラシの種は、どこの家に行けば得ることが出来るでしょう」

「息子でも娘でも、誰も死んだものの居ない家に行けば、得ることが出来ます」

彼女は、死んだ子を腰にかかえて村の中へ入り、「この家に白カラシの種がありますか」と訊ねて歩いた。その家の人が「あります」と答えると、

「それでは、この家で息子さんでも娘さんでも、今までに死んだ人はいませんか」

「何を言うのですか、生きています子供は少なく、死んだ子供の方が多いのです」

「それなら白カラシの種は受け取れません。それは私の子供の薬ではありません」

それから彼女は、同じような問答をしながら家々を訊ね歩いた。けれども彼女は白カラシの種を得ることが出来ずに、夕刻になった。

「ああ、重大なことに、私は、私の子供だけが死んだと思っていた。しかしこの村には、実に、生きています子供より死んだ子供の方が多いのだ」

このように考えた時、彼女は子供に対する執着の心から解き放たれた。彼女は子供を森に置き、尊師のもとに戻った。

「あなたはひとつかみの白カラシの種を得ましたか」

「得ませんでした。尊師よ。この村には、実に生きています人より、死んだ人の方が多く、生きています子供より、死んだ子供のほうが多いのです」

「あなたは、自分の子供だけが死んだと思い込んでいた。子供や家畜に気を奪われて、心が執着している人を死の大王はさらって行く。子供の死を受け入れたあなたは、白カラシの種の代わりに、多くの子供を得ることができたのです」

師の話が終わった時、彼女は出家を願い出て「キサーゴータミー尼」となった。

この「キサーゴータミー説話」は、5世紀のブッダゴースの著作と伝えられる『ダンマパダ・アッタカタ』の中に説かれている話だそうですが、紀元はもっと古く、ゴータミーは仏陀の弟子として実在した女性という説もあるそうです。

貧困の娘が富豪の家に嫁し、子供を失うことでまた不幸になって最後に悟りに至るとい話は、諸行無常の現実を暗示しているといわれ、仏教説話の典型的な形の一つといわれます。しかし僕は子供の死を受け入れて悟りに至る母親より、子供の死を受け入れられず、必死に子供の薬を求めて歩く母親の姿の方に感動してしまうのですが、どうでしょう。

（終り）